

昨年の11月3日に県文化賞を受けたのにつきまして、今日県生物学会の有志の方からこのような盛会を持つて頂き、この寒さにもかかわらず、しかも遠方からも多数御参会を頂き私のライフヒストリー中、特記すべきことと存じます。只今は広瀬、片山両先生から祝辞を頂き厚く御礼申し上げます。私は兵庫県の子でありますが、朝鮮に渡りその地で骨を埋める覚悟でございましたが、敗戦後兵庫県に帰りわずか十数年で県の文化賞を頂くのは恐縮の極みであります。生物学会の会長としては名前のみで何も働いておりません。私の博学は私のよめいた結果ではないかと思えます。始めは朝鮮の植物の研究をしようと思っておりましたが、それも中井氏にバトンを渡し、鳥類の研究もずいぶん金がかかるので私の手にはおえないと思い、第一次大戦後の留学の時に多数集めました文献がありますのと、金があまりかからない点、又恩師のお言葉もありまして、魚類の研究を行った次第であります。今後は老骨に鞭打つて兵庫県で働き骨を埋める覚悟であります。生物学会も会員の皆様の力でますます発展して行きますよう、また農科大学の発展も一途をたどることを念じて居ります。重ねて今後もよろしくお願い致します。

3. 乾 杯 倉 橋 氏  
 4. 祝 電 福本氏、井上氏、古川氏の祝電を渋谷氏が披露  
 5. 会員の祝辞 奥 谷 氏

篠山で新聞により文化賞の受賞を知り、今日の会の催されるのを心待ちしておりました。今日は喜んで参加させて頂きました。農大に居られた頃の先生のエピソードなどを話して祝辞にしたいと思えます。森先生の名前は昆虫学者として知つたのですが、農大へ参り先生が魚類学者であることを知りました。先生の風格は新任の助手が小使いと間違



祝賀会の森会長（当津）

to/su

えたくらい親しまれる方でありました。また先生が70才を過ぎた方とは思われにくいらい、御健康で、多紀アルプスに採集に行かれた時、先頭を切つて登られたのは先生でありました。今後共御健康で長生きされ、若い者を御指導して頂きたいと思えます。

司会者の方から会員の祝辞はつきつき指名して行くようにとの発言があり、参会者全員が祝辞を述べたが、その頃には会場もその雰囲気になり、またアルコールも程良く回り、祝辞を述べる者も、記録を取つておる者もとどもも……。

（記録・浜野、東）

## 人は自分が教えられた通りに教え

## 叱られた通りに叱る

佐 藤 民 部

今から20年ほどまえ、私は南鮮の大邱府（たいきゆうふ）にあつた慶北公立中学校の博物教師をしていた。このとき森先生には京城大学教授で朝鮮総督府の視學員として、全鮮の中等学校の理科教育の実情を視察指導せられ、私のいた学校にもおいでになつた。

その日は私が炭酸同化の沃度試法と同化澱粉粒の検鏡の生徒実験の学習を指導して御視察をいただいたのであるが、当日の授業は道庁（県庁にあたる）の視学官をはじめ大邱府内の全部の中等学校長と理科教師全員が参集しての視察授業兼研究授業であつて、大根役

者が大根なりに晴れの桜舞台に上つた日であつた。

へタな授業も曲りなりに一応終つて型通りの批評会がもたれ、その最後に森先生の御講評がおこなわれた。そのとき「顕微鏡のレンズがよごれていますよ」と温顔にいつもの微笑をもつてやさしくお叱りになられた。(もつとも先生は叱つたおぼえはないと申されているが)。

その日私としては一生一代の視察研究授業と心得て用意万端すこしの手ぬかりもあつてはならないと張切つてやつたつもりであつたのに御注意をうけて「ギクッ」とした。こわごわ十数台の顕微鏡を調べてみるとたしかに汚れている。これには全く赤面恐縮してしま

つた。

さて時代は流れて、今日私が立場上各地の認定講習や理科研究会に講師として招かれてゆくとき、常に森先生のありがたい御指導を想いおこし、後輩諸君に同じような注意をしたことがたびたびあつた。私からレンズが曇っているという注意をうけた先生方が県下に幾人かあるはずであるが、それは私の注意でなく、森先生の御注意を私が代弁しているにすぎないのであつて、もし感謝の気持でうけ取つて下さつた方があれば、どうぞ森先生にお礼を申し上げて頂きたいと存じます。

## 森会長受賞祝賀式に列して

江越千代子

先生お芽出度うございます。先生が昨年11月3日、菊薫る日、栄ある文化賞をお受けになりましたことを、心よりお喜び申し上げます。先生との話の思い出、ことに、カタシボチク調査の旅の宿では、歌の方で、先生が私にお弟子入りのエピソードもございましたので——爆笑のうちに話しがちぐはぐになり、とうとう私は、先生になりそこねましたけれど——それで、今日は拙ない歌を捧げてお祝詞にかえさせていただきます。

文化賞うけられし師の輝く榮譽のじぎくとともに  
永く薫らむ

美しき御夫婦愛に成りしと思ふ文化賞の栄お二人  
の胸に

(33. 1. 17)



左より本田、江越、森、室井の諸氏

昭和33年3月3日 カタシボ林中にて

# 森先生のこと

田 中 浄

私が森先生の名を頭に刻み込んだのは戦争中昭和18年頃かと思う、当時私は奉天朝日高等女学校に勤務していたここで生物科を担当していたのは教頭の水野馨先生と私とであつた。水野先生は満洲生物界の重鎮で御存じの方もあらうかと思うが鳥類分類の研究者であり、全満を踏破されて満洲鳥類の原色図鑑の大冊を出版された方である若輩の私なども随分御指導とくん陶をいただいた。

若気の至りで私も何かやつてやろうと水野先生の向うを張り多少興味をもつていた淡水魚を手にかけてみようと思つた。何年かさきには先生のように淡水魚の図鑑をと……無謀な夢……をえがいたものである。然し当時既に満鉄から図譜目録、大陸科学院からもそれ等が出ていたようである敗戦によつて私の夢は正しく夢として泡の如く消え去つてしまつた。

水野先生の所へは多くの学者や研究者から著者謹呈とサインした研究物が送られて来ていた一しよにいたおかげで私もそれ等に目を通せる光栄に浴した。こうした文献の中に森先生の満洲、シベリヤの淡水魚についての英文の研究物を発見し一生懸命勉強させて

頂いた此の時に初めて当時の「京城帝大の森博士」の高名を覚えた。

先生に初めてお目にかかつたのは淡路の臨海実習の時であつた私の想像していたいかめしい学者然とした先生ではなくて、いとも親しみやすい好々爺の先生であつた。講習終つて帰りの船中でも加古川上流の淡水魚についてお話を伺つた。先生にはわからないことを遠慮なくお伺い出来る温い親しいものを感じる。北条での認定講習の時にも個人的にヨーロッパナマズ（懷頭魚 *Silurus glanis* L.）についてお教を頂いた私も引揚でかえつて、ノートや僅かばかりの書物をなくし、此の上なく惜しく思い又不便を感じた。先生のような学者が沢山の文献と研究物の総てを残してお帰りになつてどんなにか御不自由、不便をお感じになられたか同類の端くれとして私にもよくわかるような気がする。

今回先生が県の文化賞をお受けになられた事を心からお慶びすると共に今後共御壮健で悠々自適御研究を楽しまれ我々にも御指導を賜るようお願いしたい。

# 森先生と私

田 中 兼 治

私が御影師範を卒業したのが大正10年で、新卒赴任の学校が西脇小学校です。時の校長は森棟二先生といつて、朝鮮から帰り神戸小学校の教頭を経て西脇の校長となられたと聞かされたが、当時はデモクラシーと自由教育とで大変な時代であつた。校長は大神戸市から来られた特に進歩的の方だし、西脇は田舎っぺだし、毎日第1時間目が全校自由時間とし、生徒達の自主的活動の時間とするのが理想であつた。所謂革新派校長の大先達であつた、此の頃私は文検受験の勉強をしていたので、校長は私を励まして下さつて自分の実弟に為三というのがあつてネ、京城大学の動物の方にいるんだが。朝鮮では冬よく雉を捕りに行つたもんだ。いくらでも捕れてネ、君、勉強するなら25才までだナー、それ迄に棟が上らなかつたらアカン、それで私は24才でパスしたわけ。このお話の弟さんが今は白髪の会長の森博士である。森先生の満洲、中国におけ

る魚類研究の真真中であつたらうか、今思い出して想像しています。

校長の森先生には公私共随分お世話になりましたが、私を大変高く評価して下さい、先生が揖保郡の視学時代に私を神戸の諏訪山小学校へ世話して下さい事があつた。辞令が西脇へ到着したのに私の気儘から転任を中止した事があつた。此の時位相済ぬと思つた事はなかつた、僕も若かつた。

それから春風秋雨30年、再びデモクラシーに代つて民主主義、自由教育に代つて新教育、明治の始めからは3回目の新教育の流行する時代になつた。白髪の老博士を我が生物学会の会長としてお迎えした時、30年前の記憶がまざまざとよみがえつて来てどんなにか私一人が勝手になつたかしがつた事であろう。森博士が兵庫県下の天然記念物指定委員長であられるのを幸としてわざわざ我が西脇市鹿野町、荒神森のイチイガシを

見に来ていただいたのはそれから数年後、27年12月14日であった。寒い日であつたが色々精密に調査して下さつた、翌15日の神戸新聞の地方版には写真入りで随分大きく取扱つてくれたが惜しいかな目通り7mより僅かに細かつたが為か今にその指定から漏れていて残念である。

視学になられた森先生はその後、永く県の教育会に居られて兵庫教育の編集に従事して居られたが、今も

御健在で郷里、姫路の町坪で老後を楽しんで居られると思つている。森会長を偲ぶよすがに令兄、棟二先生の事の方が多くなつた様だが、私は38年前から棟二校長を通じて森会長に通じているとも思つている森会長の篠山時代から何彼につけ、御世話になる事ばかり、今回先生の多年の御研鑽の功、むくいられての御目出度に際し、新卒時代からを偲び報恩の一端にもと思ひペンを持つた次第である。

## 森 為 三 先 生 の 想 出

樋 口 繁 一

森会長とは幸い兵庫農大が当地篠山町にあつたので10年余りの長きに亘り、色々御指導を受けたので印象がたくさんある。私事ではあるが長男が農大に在学しているし、或は奉職校の卒業生が農大に進学したので、折々いろいろ話をきくに付け、彼等は皆大学で一番人気のある講義の上手な先生であると言う事である。どんな点が面白いかと言うと、それは講義中例題が豊富で理解し易く生物に興味をわくと言う。

どんな例でも知つて居られる。又その例が先生御自身の体験から出た例である、例えば分類の講義では森先生の発見なさつた動物について具体的に種の決定理由を述べられ、外国学者の研究と比較して同物異名とか、或は命名年代から先取権の問題等実例で話されるので、話が生きていて時間のたつのも忘れと言う。単に分類だけでなく形態学でも生態でも實際御研究の体験であるので講義をきく学生は普通の講義と全く別の感じて深く感銘を受けるらしい。私はいつも、この話を聞くたびに、これだけの講義の出来る学者は我国にはそうたくさん無いとつけ加えるのである。学生も我が事にして、興味を感じている。

丹波地方の各地を10年余りのあいだ採集のお供をし

た事である。撰丹国境母子永沢寺とか竜蔵寺とか或は多紀アルプス、四十八滝、永上郡葛野地方とか丹波高原の方々を廻つたのであるが非常に健脚で70余才とは思えず、牧野富太郎先生の70余才の時と比較して優るとも劣らず、牧野先生以上の長寿は保証出来ると思う。

母子永沢寺を訪れた時でも極寒0°C以下数度の時であつたが寒さも何のその、溝の淡水魚から山裏の池の植物まで生物界全般、何知らぬと言うことなく、博学でことに専門のところは世界の学者との御親交もあつて、先生の話を聞いていると全く生物学史のようでもあり興味勃々たるものがある。

本会の会長に最適の方であり本県文化賞の受賞者としても最高の人であると信じます。よく承つた話に、大陸奥地の探検談は何度聞いても面白い。先生は少しも高振られる事もなく我々未熟な者も親切に御指導下さる人情豊かなことはいつも感謝している次第である。

昨年兵庫農大を御退職になつて、神戸市に転住される時、先生に記念の一軸を賜りました。

魚けものしらべ暮らして五十年

いつも座右に掛けて余香を揮っている次第です。

## 森 会 長 先 生 を 仰 ぐ

山 本 義 丸

このたび森会長先生の兵庫県文化賞御受賞を心からお慶び申し上げます。もちろんこれは先生としては当然の出来事でありましようけれども。

数多く輩出する地方学会がややもすると竜頭に蛇尾

終りがちであるのに反し、わが兵庫県生物学会が昭和22年の発足以来年々発展を重ね、益々着実な歩みを続けていることは、私達会員にとりまして誠に嬉しく心強いことであります。会の推進に当たられている役員

先生方の御尽力に対して深甚な敬意を表するものでありますが、会長先生の御力がいかに大きく作用しているかということを感じずる次第であります。頭に銀髪を戴かれる会長先生が、但馬高地の採集会などにおいてもかくしやくとして登って行かれるお姿は、正に兵庫県生物学会の推進力としてのお姿と感じられるのであります。先生はまた会員個々の活動についてもお心に掛けられ、私なども常々御激励を賜わつておりまして、深く感謝申し上げます。

私は昨年大阪府下に移り、県外会員という形になりましたが、全国に誇るに足る兵庫県生物学会の一員としていつまでも御指導御交誼を頂きたく存じて居ります。今、創刊号以来の12冊の兵庫生物を手にしてその発展の跡をふり返り、兵庫県生物学会の前途に大きな期待を寄せると共に、会長先生の益々御健勝にて学会のために御力添え頂きますようお願い致します。

## 森 為 三 先 生 の 横 顔

佐 藤 茂 樹

森先生から私が間接の御教えを頂いたのは、今から<sup>1</sup>10年を一昔として、三昔以前からのことである。当時先生は朝鮮の京城におられたのであり、私は須磨の滝川中学におつたので、遠く玄海灘を隔ててお目にはかからず、手紙も差上げたわけではないが、学校長の岡元輔先生が特別の間がらだつたので、森先生の御研究になつた論文が、岡先生のお手許に謹呈されると、たいてい私に読めといつて渡されるのであつた。こうして絶えず御教示を賜わり、未だ見ぬ先生を敬慕申し上げていたのである。

いろいろな点から森先生と岡先生とは似通つたところが多く、物言いや人に接する態度など、鏡に写した影と形のようにそつくりで、私としては森先生を思うと岡先生が心に浮び、岡先生を思うと森先生がまぶたに写るので、岡先生のお人柄を書けばそれがそつくり森先生に通ずると考えるので、いささか横道にそれて恐縮ではあるが、次の拙文の表示に対し御許しを願いたい。

私が最初滝川中学へ赴任する際、偶然にも師範卒業以来はじめての、恩師竜ヶ崎中学校長 荒井庸夫先生に、水戸から常磐線上市車内でお目にかつた。荒井先生は歴史科担当で、私が師範の寄宿舎の舎長時代、舎監長で特に御世話になつた方なので、どこへと問われたので神戸の滝川へと申し上げたところ、岡校長は朝鮮京城高等普通学校長だつた人で、最も名声の高い大校長だ、それに滝川中学は関西実業界の大立物でマツチ王といわれ、貴族院議員で育英のため、巨万の私財をなげうつて建てたのだというので、全国中学校会での大評判で話題の中心なのだ、だれの世話か、はたらきがいがある。大いに頑張りたまえと激励して下さつた。赴任する本人よりよく知つているので驚い

た。その名校長は、ふだんは余り物言わぬ方なのに、あるとき森君は立派な学者で非常に熱心で、朝鮮全土はもちろん支那滿洲にも手をのべ、東亜の博物の開拓に当り、絶えず新しい研究と後進の指導に当り骨身を惜しまず努力しているのだと、実例を挙げてお話し下さつた。この言葉の裏には森先生が良いお手本だ、お前ももつと勉強すべきだとおつしやつていることがよく解る。しかし悲しいかな鈍物の私は、ついうかうかと歳月を費し、「階前の梧葉は己に秋声」で、後悔は先に立たずの諺通りの現状なのである。

昭和の始、須磨の漁業家が1匹のサメを持参して駒ヶ林から明石の間で見た人はなし、何というのだろう。須磨でとれたのだという。浅学の私に解るはずがない。調べてみようという、標本にして下さいと置いて帰る。文献が乏しいので解らない。家へ帰つて HUTCHINSON'S Animals of All Countries XXIX p1391 にそつくりの図がありシユウタンザメと訳せるが、はつきりしないので、写生図を田中茂穂先生に送つたところ、名はオオセ *Orectolobus japonicus* (田中博士著原色日本魚類図鑑はその後昭和6年発行) 外洋に産するので、内海でとれたのは珍らしい。なお返信の終りに、岡校長は鹿児島一中校長時代は鹿児島湾の魚類を研究した方であり、朝鮮では鳥類も研究されたその道の権威者だよろしくとあつた。この魚や魚の研究には森先生の御協力があつたことと思われる。とにかく偉い方だつた事はよく承知していたが、生物学で名が響いているとは知らなかつた。ここがまた両先生の共通点で、ちよつと会つたのでは好々爺というだけで、奥底の深さが解らない。従つてある人は岡先生を評して昼行燈だ、大石良雄のような人だといつたが、森先生もそんなところが、多分におありだと思

う。

私は大正13年に特別註文の厚いノートを6冊作つた。植物学、動物学、生理衛生学、鉱物学、博物学（通論の意）生物学と科目別にして、勉強しようと発心したのであるが前記の通り。しかし博物学のノートの中にだけは、森先生の論文の抜萃がかなり詳しく、幾編か細かい文字で書いてある。記念のため、鞭撻を願うために森先生の御署名を頂いてある。

一例を挙げると

Fresh-Water Fishes from Tsi-nan, China, With Descriptions of Five New Species には次の3種の図がある。

*Leucogobis tsinanensis* Mori

*Coreius longibarbus* Mori

*Yoorchias anguillaris* Mori

朝鮮産翼手目に就いて 21種の記載

朝鮮産翼手目の検索表 内務次官提出前

朝鮮石器時代に飼育せし犬の品種について

馬の進化……朝鮮馬と蒙古馬

人類の起原と亜細亜……発祥地、北京原人

北京原人と同時に出土した化石など

オオセと一致する、ジユウタンザメの説明を原文から、その一部を転記する。

Wobbegong or Carpet-Shark

Owing to its Coloration and the Seaweed-like appendages round its mouth, this shark harmonises with the sea-bottom on which it lies in wait for its prey, and is thus enabled to escape detection. It inhabits Australian and Japanese waters.

昭和12年に内地留学のつもりで東京に出た私は、10年間の約束を2年の延長で12年振りて、再び神戸に戻りみな様の御世話を願うことになり、特にお慕っていた森先生が内地に引揚げられ、昭和22年から飛躍した生物学会の会長として、全般の御指導を仰ぎ得るにいたつたことは、この上もない幸である。

## 森会長の長寿と生物学会の発展を願う

渋谷 久雄

わたしが初めて会長にお会いしたのは、22年8月に催された但馬の採集会であった。白髪の好好爺という感じのうちに、どことなく学者としての気品のあふれる名会長の印象であった。

この年の6月に、明石で兵庫県生物学会の結成大会が開かれたばかりで、この大会を皮切りに各地で支部の発会が行なわれようとしている時期であった。但馬の採集会は、生物学会発足の原動力となった但馬支部（但馬生物学会）の要請で本部と支部の行事を兼ねて行われたものである。本部の室井氏が上京したり、地元の土橋、山本両氏をはじめ、支部役員諸氏のお骨折りで、東大の本田正次先生をお迎えしての盛大な会が催されたのであった。8月12、13の2日にわたる充実した内容であったため、かなり強行な採集会であったが、会長は壯者をしのぐ元気で、連日疲労の色もなく、若い者達の先頭に立って指導された。こんな会長の姿を見て、大いに敬服したものである。

先日「森為三先生兵庫県文化賞受賞記念祝賀会」に列席して、つくづく感じたことは初めてお会いした日の会長と今日の会長とがまったく変わっておられないということであった。当時からは、すでに10年余も過

ぎて会長は74才にもなれたのに、この壮健さである。実におめでたい限りである。今後も増々健康で長寿を全うされ、一日も長く会長の職を続けて下さるようお願いしたい。

会長を中心とした生物学会10年の歩みは目ざましいものであった。これひとえに会長の人徳によるものと思うが、今回新名簿を製作するに当り、発足当時の古い名簿を引張り出して見る機会に遭遇し、今昔の感を深くした。終戦後、外地から帰還したわたしが、明石の女子商業学校に奉職することになったのが22年7月である。初出勤の17日に同校で本部役員会が開かれたということは、偶然にしてはあまりにも不思議な気がする。さっそく、当時校長であった現紅谷理事長から、6月に行われた結成大会の模様などを説明され、お前が会計委員をやるようにというわけで、名簿と会計簿をもらったのである。

当時わたしが預った名簿には50名内外の氏名が連ねてあるだけで、会計簿の22年度決算額もわずかに1万円にすぎない。それが前記支部結成大会が続々と行われて、23年度には全支部の名簿が出来上っている。会長数も350名を越え、会計決算額も5万円となってい

る。その後、毎年若干会員数に増加があり、一時は500名を越えたこともあるが、連絡のつかない会員もあり、実働会員は450員が最高であったと思う。したがって23年に305名とはいえもうその当時立派に出来上っていたのである。会員数にはほとんど変化がないが、会計決算額は増加の一途で最近20万円前後となり、会の発展振りを示している。

今回の新名簿では会員数が427名となっている。このうち23年度名簿に登録されている人が何名ぐらいあるか調べてみたところ、約150名の多きに達した。これらの方々が生物学会推進の大きな原動力となられたことは確かであって、誠に力強い限りである。長い10年の間には退会者も相当沢山あった。しかしそれにも増して新進気鋭の方々が進んで入会され、ややもすればマンネリズムに陥りやすい会に新風を吹き込んで下さったのは有難いことであった。しかしそれにも増して新進気鋭の方々が進んで入会され、ややもすればマンネリズムに陥りやすい会に新風を吹き込んで下さったのは有難いことであった。新名簿を整理した結果

の一部を末尾に付したが、所属別に見ると、教職にない一般と学生の方が合せて41名もあることは本会の大きな特色といえよう。また年齢別に見ると、最も活動的である30代の方が圧倒的に多いことは、生物学会の若々しさ、発展性を象徴するものであると思う。

簡単な数字ではあるが、以上はすべて本会の前途の明るさを示すものであるような感じがする。会長を中心に会員が互いに手をつないで、生物学、生物教育研究の広場として育てていきたいものである。皆さんと共に生物学会の発展を心から願ってやみません。

所属別会員数						
小	中	高	大	一般	学生	計
78	110	187	11	34	7	427

  

年齢別会員数								
70代	60	50	40	30	20	10	不明	計
6	12	49	97	164	70	1	28	427

## 黒 豆 の 味

古 川 博 二

たしか昭和26年の5月だったと思う。篠山で県生物学会主催の採集会が催され、私も参加させてもらった。初日は付近の山で採集が行われたが、私は学校の都合で遅れたのでそれには参加しなかった。その翌日私共は城北村へ陸産貝類の採集に出かけた。当日は朝からじゃんじゃん雨が降っていたが、陸産貝の採集には却って好都合と傘をさして山路を登った。大型の実に立派なニシキマイマイやオオギセルを袋一ぱい採ったことを思い出す。しかし私がここで述べようとするのは、採集品のことではない。会長森為三先生の心からなる御歓待をうけた事である。

当時篠山農大の副学長であらせられた先生は地元の有力者と共に私共を元藩主の青山邸の一室へお招き下され、色々と有益なお話を承わり、その上御馳走の数々をいただき実に有難くも愉快な一夜をすごしたのであった。この時私の心に最も強く印象づけられたのは、先生の奥様が私共の為に特に念を入れてたいて下さったという黒豆の味であった。もともと丹波は黒豆の本場として名高く、川北大豆とか波部黒の名は古くから知っていた。子供の頃から甘いものはあまり好まなかった私も、煮豆だけは好きであった。甘すぎると

塩をまぶして食べたものである。しかし篠山でいただいた黒豆の味は私の知っている黒豆の味とは全然ちがった旨さをもっていた。もっちりとした舌ざわり、淡泊なその味、ふっくりと張くれて、皺のないつやつやしき、私共はただ美しいな、旨いなと歓声をもらすのみであった。長い歴史を経て生れた豆の質と、久しき亘る経験による煮方、先生のお情け、奥様の心づくしなど、一貫した人間の真実から生れた味なのである。

あれからもう8年になるが、その間一度もあんなおいしい黒豆を食べたことがなかった。ところが今年の正月神戸の或る料亭で、あの時の味を思い出すような黒豆に出合った。もちろんあの日程の感激はなかったが、ふと篠山のことを思い出し、女中に聞くと家の奥さまが煮たものです。というので、奥様は丹波の人かと尋ねたら、但馬の人であった。この時しみじみと森先生のことを思い出しながら黒豆を食べ、同席の友にも思い出を話したのであった。

× × ×

森為三先生は兵庫生物学会発足以来今日に到るまで、些細なことにもよく気を配られ、あの不便な篠山

から何回でも、県下各地に出張して、骨身おしませず我々を指導し鞭撻して下さい大恩人であり、生物学会の大功労者でもある。だからして今回文化賞受賞の榮譽を担われたわけだが、私は校長会に拒まれてその祝

賀会にも出席出来ず誠に相済まなく思っている。先生の記念号におくるにはあまりにもお粗末なものだが、これも不憫な弟子のしわざとしてお許し頂きたい。

## 兵庫生物が何故続くか

室 井 緯

何処へ旅しても、あの膨大な兵庫生物が何故続くか、どこの生物の地方誌も、先ず3号雑誌になることに決っているのに兵庫生物だけが何故、このおきてを破って続々と刊行され、ますます内容が充実するののかとの疑問を受けるのである。

私は即座に半永久的に続く、それには続く条件が揃っているからだ、先ず少くとも森会長の健康な間は続く、何故ならば総べての尻ぬぐいは会長自身が私費をなげ打ってみてくれるからだ、と答える。

そう思っほうほうの地方紙を見直してみると発刊後すぐ跡方もなくつぶれてしまう。また、本庫内の他の学科にしてもそうで始めのうちは可成り景気よくやっているようだが、いつとはなしに3号誌で終止符が打たれる。考えてみると気の毒なことである。

それにもう一つの原因は会員諸氏の研究熱の旺盛なことである。私は特記して感謝したいと思うことは大抵の大学の先生方は何処の会でも顧問とか、名誉会員とか、その他の名目で納っておられるのであるが、本

県の大学の諸先生は自ら進んで平会員になられ、先きんじて会費を納入して下さいすることである。こうした先生方が他の会員とともに採集会に、研究会に御参加、ともに歩んで下さることが、どれほど兵庫生物の推進力になっているか、兵庫県に生を得たもの、あるいは本県に職を捧じているわれわれにとってかけがえのない有難いことである。そのために研究も進み、学問に対して興味も湧き、ますます研究にも熱が出るのである。

改めて私は答える、地方の自然科学の研究や雑誌の発行には是非、会長の物質的、精神的の互担と大学の諸先生の無料サービスがなければ本誌などは速刻中止し、崩壊してしまう。

ただ今、森会長の県文化賞受領記念号を出版するに当りまして会長のますます御壮健で御研究の完成をお祈りしますと同時に会員諸氏の絶大なる御援助を感謝したい。  
(本誌編集部)

## カタシボチク調査の旅

江 越 千 代 子

森会長県文化賞御受賞のことを、心よりお喜び申し上げます。

さて、先生との学会、その他ご一緒した思い出の中でも、本年三月二日、三日、本田正次先生をお迎えして、森会長、室井先生のお供で竜野のかたしぼちくの調査に参りました時のことを今も楽しく思い出して居ります。室井先生のお名付けによる「かたしぼちく」、篋所有者、梅玉旅館の主人に懇望されて、記念帳に皆のサインを入れる段になり、森先生が和歌をひねり出されるやら、皆がわれこそはけつさくを書き残さんものと、復ないで爆笑しながら大騒ぎをした愉快な光景は未だ臉に残つて居ります。

椿が赫く赫くもえていたあの白壁つづく築地の街を

賞でながら、粉雪ふる中を鶏籠山にのぼつた事なども、楽しい美しい思い出のよすがでございます。

ひひと舞う雪に面を打たせつつ

君と訪いたる播州路の旅

かきわけてゆく笹の道鶏籠山の

両見峠にわれの見む夢

白壁の築地つづけり坂道の

椿はくれないにこぶしはしろく

しは三十二などとざれごと言いつつも

珍らなる竹に眸あつめつ

珍らなるかたしぼちくの竹篋を

探ぬてゆかむ旅をふたたび

1958. 11. 27